様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２５８５

研究課題名（和文）アイデンティティの揺らぎ体験を活かす保育者力量形成プログラムの実践開発

研究課題名（英文）The practical development of a program to enhance the competence of childcare providers by utilizing the experience of identity swaying

研究代表者
西山　修（NISHIYAMA, Osamu）

岡山大学・教育学域・教授

研究者番号：５０３１０８５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では先ず，保育者の自伝的記憶としての「アイデンティティの揺らぎ体験」と保育者効力感との関係を検討した。揺らぎ体験の有無が，保育者効力感に与える影響を分析した結果，揺らぎ体験を持つ保育者は，それを持たない者と比べ保育者効力感が明らかに高かった。揺らぎ体験の契機による保育者効力感の相違は見出されなかった。次に，保育者効力感の高低による，記述内容の相違を検討した。その結果，保育者効力感の高い保育者の記述は，自我関与性が高く，今後に活かしやすい形で記憶が保持されていることが示唆された。これらの知見から，アイデンティティの揺らぎ体験を活かす支援プログラムの枠組みを具体的に提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
社会の変動を背景に，今，保育者には一層高い資質・力量が求められている。他方，養成期，初任期，中堅期は成人形成期と重なり，アイデンティティ形成という発達上の課題に直面する時期でもある。本研究では主に，保育者の自伝的記憶としての「アイデンティティの揺らぎ体験」と保育者効力感との関係を検討した。そこで得られた知見を踏まえ，アイデンティティの揺らぎ体験を活かす支援プログラムの枠組みを具体的に提案した。これによって，保育者自身の自我の成長発達を志向した成長支援と実践の質保証を図る方途が拓かれたことに本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study started with an examination of the relationship between the “experience of identity swaying”(as stated in the autobiographical memory of childcare providers) and their sense of efficacy. The analysis of the influence of the experiences of the swaying on childcare provider’s efficacy reveals that those who experienced swaying has a higher sense of efficacy but no differences were found in the sense of efficacy depending on the triggers of the swaying. Next, I examined the differences in the content of the descriptions depending on the level of childcare provider efficacy. The results showed that the descriptions of the child caregivers with high efficacy were perceived as being closely related to themselves. In addition, the memories were retained in a form that could be easily utilized in the future. Based on these findings, I proposed a specific framework for a support program that makes use of the experience of identity swaying.

研究分野：発達心理学

キーワード：保育者　アイデンティティ　自伝的記憶　揺らぎ体験　保育者効力感

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 近年，世界の潮流は幼児教育・保育の振興にあり，その担い手（保育者）の実践の質保証やその支援に関心が高まっている（e.g.，OECD，2017；厚労省，2010）。我が国でも，子どもや家庭を巡る問題の複雑化に対応するため，保育者の専門性や社会的責任は，保育所保育指針，幼稚園教育要領等にも謳われている。しかしながら，我が国の幼児教育・保育は市場原理の導入と効率化に傾斜していると言わざるを得ない。正規雇用の経験者（特に中堅）の減少等により豊かな保育実践の継承が困難になってきている。また，業務の拡大や多様化から保育者の疲弊感が増大している。保育者の実践の質を高め維持することが，子どもの健やかな育ちを保証する。実践の質保証は喫緊の課題となっている。

(2) Erikson（1950）によってアイデンティティの概念が提示されて以来，膨大な研究が蓄積されてきた。しかしながら初期の成果は青年男性を対象に導き出されたものであり，近年になって女性のアイデンティティ形成に関する研究も蓄積されてきた（e.g.，Josselson，1996；西山，2009）。またアイデンティティ形成は青年期に完了するものではなく，様々な関係性の中で，それ以降も危機と再統合が続くものと捉えられてきた。アイデンティティの「揺らぎ」と再統合という経験の中で，保育者は成長していくと考えられる。

本研究は主に女性を対象に，アイデンティティ形成を専門性の形成を含めた次元へと広げ検討する。ある特定の専門職に焦点化し，アイデンティティの形成過程の知見を活用し，変容を目指すようなアイデンティティ研究は少なく，本研究はその先駆に位置する。

２．研究の目的

(1) 既述の学術的背景，当該研究分野の動向などを踏まえ，本研究の目的を次のように設定した。先ず，保育者固有のアイデンティティ形成とその再統合のプロセスを先行研究から改めて整理する。次に，アイデンティティ形成に関わる揺らぎ体験の自伝的記憶など，他の主な要因との関連を明らかにし，保育者への働き掛けの手掛かりを得る。さらに，保育者のアイデンティティ形成における「揺らぎ」を活用した具体的な支援プログラムを提示する。これらをもって，保育者の成長支援と実践の質保証を図ることを目指す。

(2) 保育者という専門職として多様な人間関係の中に置かれたとき，安定した個（アイデンティティ）を自覚できるか否かは重要である。「教師の人間性が陶冶する」とは従来から言われてきたが，本研究は現代保育者のアイデンティティ形成と実践とを結び付け，実証的に明らかにしようとする点に特色を持つ。保育者が，豊かな人間性を備えた「人」へと成長していくことを促す要因，妨げている要因は何かについて考察し，一人でも多く，真の専門性を備えた保育者が実践現場に増えていく方策を考える。また，保育者支援のプログラム開発に向けた具体的な枠組みを提示し，その先の実践の質保証まで繋げることを目指す。

３．研究の方法

(1) 本研究では，保育者固有のアイデンティティ形成とその再統合のプロセス等を，先行研究を中心に整理した。次に，保育者の自伝的記憶等を収集するための質問紙調査を実施した。さらに，得られた知見を踏まえ，保育者の「揺らぎ」体験を活用した支援プログラムの枠組みを提示した。本研究成果報告書では，質問紙調査を中心に報告する。

①調査対象・時期：岡山県内で開催された保育者研修・講習の受講者 91 名に対し，質問紙調査を実施した。質問紙のうち，後述の分析に必要な項目全てに回答があった保育者 79 名（所属：公立幼 22 名，私立幼 8 名，公立保 16 名，私立保 22 名，こども園等 11 名。性別：男性１名，女性 78 名）を分析対象とした。保育者の平均年齢は 41.30 歳（標準偏差 6.82），保育経験年数の平均は 13.78 年（標準偏差 6.91）であった。調査時期は，20XX 年８月であった。
②調査内容・手続：アイデンティティの揺らぎ体験と保育者効力感等との関係を検討するため，質問紙への回答を求めた。質問紙には次の項目を組み込み，分析に用いた。

アイデンティティの揺らぎ体験：「これまでの保育の中でもっとも記憶に残っている，自分の保育者としてのアイデンティティが揺らいだ体験を１つ挙げ，次の①～④などを含め出来るだけ詳しく教えてください」と尋ね，自由記述を求めた。具体的には，①その時の状況や様子，②その時あなたが感じたこと，③その後，その体験が保育に生かされたこと，及び④今振り返ってその時のことをどう思うか，とした。これらにより自伝的記憶を想起する手立てとした。また，その経験が，何歳の頃で，保育者になって何年目の頃か（経験の時期）を尋ね，記入を求めた。

保育者効力感尺度：三木・桜井（1998）による 10 項目。回答は「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「かなりそう思わない」「全くそう思わない」の７段階評定（７～１点）で得点化した。

保育の振り返りの意識：２項目。具体的には，「私は，自分の保育を振り返ることが多い」「私は，自分の保育を振り返ることが少ない（反転項目）」とし，今回の分析に用いていない４項目と混ぜて提示した。回答は「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかというとあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」

「全くあてはまらない」の７段階評定（７～１点）で得点化し，２項目の合計点を分析に用いた。
その他，「現在の保育の充実度」「これから保育をやっていく自信（保育の遂行への自信）」を0～100 点で得点化を求めた。回答は無記名とし，フェイスシートとして「性別」「年齢」「所属（公立私立，幼保等）」「保育経験年数」等の記入を求めた。質問紙の一部には本研究では用いない，保育内容「人間関係」に関わる効力感を問う項目等も含まれた。
調査対象にはデータは全て統計的に処理し，個人を特定することはないこと，結果の公表では匿名性を厳守すること等を伝え，同意を得た者のみに調査を実施した。回答に要する時間は 20～30 分程度であった。記入には十分な時間を確保し，出来るだけ詳細な記述を求めた。なお，調査実施に関わる配慮等は，日本発達心理学会（2000）の倫理基準に準じた。

４．研究成果

(1) アイデンティティの揺らぎ体験の有無と保育者効力感

先ず，保育者の揺らぎ体験の有無と保育者効力感との関係を検討した。独立変数を揺らぎ体験の有無，従属変数を保育者効力感とする対応のない１要因の分散分析を行った。その結果，統計的に有意な主効果が認められた（$F_{(1,77)}=7.93$, $p<.01$）。結果から，揺らぎ体験を挙げることが出来る保育者は，揺らぎ体験を挙げることが出来ない保育者より，現在の保育者効力感が高いことが明らかになった。西山（2006）は，保育者効力感の高い保育者は，何らかの実践を意識的に行っていることを確認し，効力感という認知面と保育実践という行動面は，強く連動していると述べている。揺らぎ体験を挙げる保育者は現在，高い効力感を持ち，見通しを持って保育実践を行っていると考えることができる。
次に，保育者の揺らぎ体験の有無と今回取り上げた関連変数との関係を検討した。１要因分散分析の結果，「保育の遂行への自信」において，有意な主効果が認められた（$F_{(1,77)}=6.66$, $p<.05$）。「保育の充実度」「保育の振り返りの意識」には，有意な主効果は認められなかった（順に，$F_{(1,77)}=.10, 1.88$, いずれも *n.s.*）。「保育の遂行への自信」は，これから保育をやっていく自信について数値化を求めたものであり，先の保育者効力感の結果を別の訊ね方から確認出来たとも言える。一方，現時点での「保育の充実度」には，揺らぎ体験を有していることが直接影響するものではなかった。「保育の充実度」は，現在置かれている環境要因，例えば，職場環境や立場，子ども，保護者，同僚との関係など外的な要因に帰する部分が大きいと考えられる。「保育の振り返りの意識」では，揺らぎ体験の有無により，保育実践を振り返ったり省察したりする傾向に違いがあることも予想されたが，違いは認められなかった。揺らぎ体験を有している保育者が，特に振り返りを意識して行っている訳ではないと言える。
さらに，揺らぎ体験あり群となし群における，年齢や経験の特徴を確認した。保育者の年齢では，揺らぎ体験あり群は平均 41.38 歳（標準偏差 6.92），なし群は平均 41.06 歳（標準偏差 6.67）であった。また，保育経験年数では，揺らぎ体験あり群は平均 14.40 年（標準偏差 7.08），なし群は平均 11.67 年（標準偏差 6.04）であった。１要因分散分析を行った結果，いずれも有意な主効果は認められなかった（順に，$F_{(1,77)}=.03, 2.21$, いずれも *n.s.*）。今回，「これまでの保育の中でもっとも記憶に残っている，自分の保育者としてのアイデンティティが揺らいだ体験を１つ挙げ，（中略）出来るだけ詳しく教えてください」と尋ね，自由記述を求めた。揺らぎ体験を挙げることが出来ない保育者も一定数いることが確認されたが，揺らぎ体験を挙げることが出来た保育者と比べたとき，年齢や保育経験年数の違いはないと言える。

(2) アイデンティティの揺らぎ体験の契機と保育者効力感

次に，保育者の揺らぎ体験を，その契機により分類・整理した。揺らぎ体験には，保育の中で，子どもとの関わりを契機としてエピソードが起こり，自らのアイデンティティの揺らぎを覚えるもの，保護者との関わりを契機としてエピソードが起こり，子どもとの関わりに範囲が拡大するものなど様々である。ここでは，その最初の契機が何であったかに注目し分類した。その結果，分類カテゴリーとして，「子ども」「保護者」「園長・同僚」「その他」を設定することができた。例えば，ある保育者は，多動で多くのサポートが必要な男児との関わりを契機に，自信を失う。様々な取組を試みる中で，これまで一人一人の子どもと向き合うことが出来ていなかった自分に気付かされる（「子ども」に分類）。「その他」の中には，産休明けの不適応，外的要因による環境の急変などが含まれた。信頼性を確認するために，第１筆者と共著者１名が，全データの約 20%（$n=15$）のデータを無作為に選出し，κ係数を求めた。その結果，κ=.91 という良好な値を得た。そこで，全体の分類は第１筆者が行った。
先ず，独立変数を揺らぎ体験の契機，従属変数を保育者効力感とする対応のない１要因分散分析を行った。その結果，統計的に有意な主効果は認められなかった（$F_{(3,57)}=.89$, *n.s.*）。揺らぎ体験の契機の違いによる，現在の保育者効力感への影響は見られなかった。次に，保育者の揺らぎ体験の契機と今回取り上げた関連変数との関係を検討した。１要因分散分析の結果，「保育の振り返りの意識」において，有意な主効果が認められた（$F_{(3,57)}=3.20$, $p<.05$）。「保育の充実度」「保育の遂行への自信」には，有意な主効果は認められなかった（順に，$F_{(3,57)}=1.20, .84$, いずれも *n.s.*）。そこで，「保育の振り返りの意識」について，Bonferroni 法による多重比較を行ったが，各水準間に有意な違いは見られなかった。さらに，揺らぎ体験の契機における，年齢や経験の特徴を確認した。１要因分散分析の結果，「揺らぎ体験は何年前か」において，有意な主効果が認められた（$F_{(3,57)}=2.91$, $p<.05$）。その他では，有意な主効果は認められなかった（順に，F

$_{(3,57)}$ = 2.42,　.47,　.54,　.47 いずれも *n.s.*）。そこで，「揺らぎ体験は何年前か」について，Bonferroni 法による多重比較を行った結果，「その他」よりも，「保護者」において有意に年数が多いことが判明した。例えば，「保護者から新卒の担任では不安と暗に言われた」「担任が見逃していた子どもの行動について保護者から指摘を受けた」など，保護者からの指摘やクレームが，保育者としての自己を見つめ直す契機となり，揺らぎ体験として記憶に刻まれていることは考えられる。保護者を契機としたアイデンティティの揺らぎ体験は，「その他」に比べ，長く自伝的記憶として保持され，現在の保育実践に影響を及ぼしている可能性がある。

(3) 保育者効力感の高低からみたアイデンティティの揺らぎ体験の特徴

保育者の揺らぎ体験に関わる自由記述データを量的に分析することを試みた。具体的には，現在の保育者効力感の高低により，アイデンティティの揺らぎ体験に関わる記述に如何なる特徴があるか，テキストマイニングを用いて検討した。先ず，揺らぎ体験を挙げた保育者の内，保育者効力感が高い者（平均値＋½SD 以上の保育者 21 名。以下，高群）と，保育者効力感が低い者（平均値－½SD 以下の保育者 15 名。以下，低群）を選出し，残りの 25 名を中群とした。3 群に実質的な違いがあるか確認するため，保育者効力感を従属変数とする 1 要因分散分析を行った結果，有意な主効果が認められた（$F_{(2,58)}$=95.74, p<.001）。Bonferroni 法による多重比較の結果，高群は中群より高く，中群は低群より高いことが確認された。

保育実践におけるアイデンティティの揺らぎ体験について，保育者効力感の高低による全体的な傾向を検討するため，全記述データを対象にテキストマイニングソフト・KHCoder（Ver.3.beta.07e）による分析を試みた。先ず，保育者が記述した全文を ChaSen により分かち書きし，10,324 語を抽出した。抽出語の種類は 1,359 語であった。その中から 3,921 語が分析に用いられた。分析に用いた品詞は，KHCoder の品詞体系に従った。また，一部の語を分けずに分析するため，強制抽出の処理を行った（例えば「人間関係」「保育者」「保護者」など）。

次に，保育者による記述の全体的傾向を把握するため，出現数 10 前後を目安に「共起ネットワーク」の検討を行った。保育者効力感の高さ（高群，中群，低群）を見出しとして含めた共起ネットワークを作成した（表示語数 51 語（入力語数 68 語），表示共起関係 80（入力共起関係 182），Jaccard 係数 .167 以上）。また，保育者効力感高・中・低群毎の特徴語と Jaccard の類似性測度も確認した。得られた特徴語は，コンコーダンス分析によって前後の文脈を逐一確認した。

先ず，保育者効力感・高群では，「自分」「思う」「見る」「感じる」「言葉」「保育」などの語との共起関係が強かった。また，独自の語として「保護者」「自分自身」などが示された。高群では，「自分」「自分自身」という語が，エピソードの記述の中に頻出している。例えば，「自分なりに」「自分の保育」「自分自身が学んで」等のように，それまでの自分の思いや保育観とのズレ，欠損を認識し，保育者としてのアイデンティティが揺らいだ体験を自分なりに解釈している姿が表れている。動詞に注目すると「思う」「見る」「感じる」などと共起関係が強く，「～することが大切だと思った」「～の大切さを感じた」等のように，揺らぎ体験を自ら振り返り，これから何を大切にしていけばよいかといった情報を含める形で記憶されていることがうかがえる。保護者に関わる記述が比較的多いのも特徴と言える。周囲の「言葉」を受け止め，「自分」の「言葉」を振り返り，「自分」なりに思考を巡らせ，「今」に繋がっていることを実感している。これからの保育に活かしうる形で，自伝的記憶が想起されやすいようパッケージ化されている。揺らぎ体験は，総じて自我関与性が強く，現在に至っては，自らの連続性を確認する役割を果たしていると言える。

次に，保育者効力感・中群では，「子ども」「保育者」「思う」「気持ち」「園」などの保育に関わる一般的な語と共起関係が強い。また，独自の語として「気持ち」「理解」「気」「遊び」などが示された。子どもの「気持ち」，親の「気持ち」を「理解」しようとしたり，「気」になる「子ども」に配慮したりしたエピソード等の中で使用されている。「遊び」は，子ども中心の保育を実践していく上で，保育者が大切にしていきたいスタンスの中で記述されている。動詞に注目すると，「分かる」「考える」などが特徴的と言える。この内，「分かる」については，「～だということが分かった」「その時は分からなかった」といった様々な文脈で使われている。

さらに，保育者効力感・低群では，「クラス」「考える」「保育」「保育者」「関係」「向ける」などの語との共起関係が強い。また，独自の語として「向ける」「反省」「関係」などが示された。「クラス」の語は，子どもの集団が強く意識されているとき，複数担任の中での難しさが意識されているときなどに現れている。後者については，多くの場合，クラス内の上司，同僚に関わるエピソードが記されている。動詞に注目すると「考える」「向ける」「見る」「言う」などと共起関係が強い。考えることの重要性を意識しつつも，これからの保育に活かしうる具体的な記述には欠ける傾向がある。また，「向ける」は，「発表会に向けて」「就学に向けて」など目指すところを示す文脈で使用されている。全体として，揺らぎ体験は，回りの人的要因や環境によって引き起こされたものと捉えられており，また，今とどう繋がっているかといった記述は少ない。

(4) プログラム開発に関わる知見と提案

本研究では，保育者の自伝的記憶であるアイデンティティの揺らぎ体験と保育者効力感等との関係を検討した。具体的には，自伝的記憶としての揺らぎ体験を持つ保育者とそれを持たない保育者では，保育者効力感に違いがあるのか，揺らぎ体験の契機と保育者効力感との関連はあるのか，等について検討した。また，記述の質的検討を試みた。その結果，次のような点が明らか

になった。第１に，揺らぎ体験を挙げることが出来る保育者は，揺らぎ体験を挙げることが出来ない保育者より，現在の保育者効力感が高いことが明らかになった。また，揺らぎ体験の契機による，保育者効力感の相違は見出されなかった。一方，保護者からの指摘やクレーム等を契機としたアイデンティティの揺らぎ体験は，長く自伝的記憶として保持され，現在の保育実践に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

第２に，テキストマイニングによる量的な分析等から，保育者効力感の高い保育者の揺らぎ体験は，総じて自我関与性が強く，現在に至っては，自らの連続性を確認する役割を果たしていることが示唆された。「自分」「自分自身」という語が，エピソードの記述の中に頻出し，保育者としてのアイデンティティが揺らいだ体験を自分なりに解釈している姿が表れている。保護者に関わる記述が比較的多いのも特徴と言える。これからの保育に活かしうる形で，自伝的記憶が想起されやすいようパッケージ化されていることも示唆された。

以上を踏まえ，プログラムを開発する上で，次の点を指摘できる。

先ず，自伝的記憶としての揺らぎ体験の有無が，保育者効力感と強い関係にあることが示されたことから，揺らぎ体験を活かし保育者効力感を高めるプログラム開発の可能性が拓かれたといえる。自らの揺らぎ体験を捉え直し，効力感と親和性の高い認知行動論的な技法等を取り入れ，保育者の自信や見通しを高めることが，持続的な力量形成に繋がると考えられる。

従来の保育者を対象とする研修においては，その多くが集団を対象とした講義法が中心と言える。その結果，研修の折にいくら目指すべき保育を知り，知識を得たとしても，日々の保育において実践に移せる者は少なく，また実行したとしても具体的な評価がないために一般的に持続が難しい。認知行動論的な技法では，参加者が行動を自ら設定し，実行していくという自己制御力の獲得に焦点を当てる。その点で，従来の研修とはねらいも方法も全く異なる，実効性を伴うプログラムとなり得る。プログラムでは，①効力感，行動(実践)，成果(結果)の関係と行動変容の機制に関する心理教育，②揺らぎ体験の振り返り・捉え直し，③具体的な行動目標の設定，④成功感と自信を高めるための自己観察，⑤目標行動を実行しやすくするための環境調整と支援の拡充，という５つの要素から構成することが考えられる。

次に，プログラムの構成要素の内，②について次の点が指摘できる。今回，アイデンティティの揺らぎ体験に相当するエピソードを記述することができない保育者が存在し，これらの保育者の効力感が低いことが確認された。自伝的記憶の機能（Bluck，2003）から考えるとき，保育者としての自己を確認したり，今後の保育を方向付けたりするようなエピソードを持たないために，保育者効力感が低下しており，自信や見通しに欠けている可能性も考えられる。過去の記憶の中から，自身が経験したエピソードを改めて再認識し，今まで意識化されていなかった揺らぎ体験を自覚できるよう促すことが，効力感向上に繋がる可能性がある。また，そのような働き掛けは，日常の保育の中で，自らの経験をその後の保育に活かすためのエピソードとして記銘，保持していこうとする行動の習慣化にも繋がる。

さらに，自伝的記憶として揺らぎ体験を挙げることが出来る保育者への働き掛けも考え得る。吉田・田中・西山（2022）は，保育者が自ら気付き，記憶した「気付き体験」を，単に省察や反省のための出来事とするのではなく，新たな枠組みで肯定的に捉え直すことで効力感を高める機能を持った体験になり得ることを明らかにしている。揺らぎ体験を改めて肯定的に捉え，他者と共有する機会等を設けることで，保育者としての確かな効力感の維持・向上にも寄与すると考えられる。今回の結果から，保護者からの指摘やクレーム等を契機としたアイデンティティの揺らぎ体験は，長く自伝的記憶として保持され，現在の保育に影響を及ぼしている可能性が示唆された。そのような，当時はネガティブなエピソードの捉え直しは一層有効と考えられる。またその際，「自分にとってこのエピソードは_ 」「この出来事をこれからの保育に活かすために私は_ 」のように，自分との関わりを一層強調した形で，文章完成法等を援用した振り返りを促し，自我の関与を高めることも考えられる。さらに，個々の揺らぎ体験と自分の中での位置付けを同僚等との対話を通じて，より深い理解に導くことも考えられる。自らの揺らぎ体験を意味ある形で記銘，保持，想起することは，一時的な意欲の向上に止まらず，長期にわたり保育者を支える資産になり得ると考えられる。

＜主な引用文献＞

Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 84(2), 191-215.

Bluck, S. (2003) Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. Memory, 11(2), 113-123.

吉田満穂、田中修敬、西山修、気付き体験を活かして効力感を高める保育者支援プログラムの開発、応用教育心理学研究、第 38 巻第 2 号、2022、3-16

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 西山 修、若田 美香、馬場 訓子	４．巻 185
２．論文標題 Relationship between the Experience of Identity Swaying in Childcare Practice and Childcare Workers’ Efficacy	５．発行年 2024年
３．雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	６．最初と最後の頁 73～82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/bgeou/66708	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関